

在任当時の大学の状況

私は2015年4月から2021年3月まで理事長職を務めさせていただきました。

本学に着任前の私は横浜市職員として、主に交通や環境部門など現場セクションに携わり大学はもとより教育分野の経験は皆無でした。

そうした私の目には、緑豊かな八景キャンパスに集う勤勉な学生の姿が眩しく、新鮮に映ったことを鮮明に覚えています。

一方で時間の経過とともに、妙に気になる二つの空気感を感じるようにもなりました。

第一に教員の方々が皆さん優秀な教育者、研究者であることは間違いないのですが、教員間や教職員間の自由闊達な討論や議論に欠ける面があるように感じました。

第二に職員の皆さんも優秀な人材揃いなのですが、当時は正規職員に比べ嘱託職員の方や派遣職員の方など、非正規職員の方のウエイトの高さが目立ちました。

2000年代に始まる国を挙げての大学改革の中で、先人達は大変なご苦勞をされて横浜市立大学の法人化を達成し本学を守り育てて来ました。諸先輩のご心勞を拝察いたします。

反面、あらゆる改革には副反応もつきものです。私が抱いた二つの問題意識も本学法人化という大転換期の副反応の残滓なのではないか。何人かの皆さんにお会いし、お話しした結果こうした考えに至りました。

この素晴らしい大学が一層飛躍するためにはこの克服が必須と痛感した次第です。

そのため私が成すべきことは、一にも二にも現場に足を運び、教育、研究、臨床及び事務の現場・最前線を担っている皆さんと率直に議論することと心に定めました。多分に独りよがりではありましたが、この方針を貫くことが6年間の私のテーマになりました。

苦勞したことなど

教職員の皆さん、時には学生の皆さんとお会いして、フランクにお話しすることには何の苦勞もありませんでした。皆さんは新米理事長を快く迎え入れてくれました。

教職員間の垣根が低いこと、学生と教員の距離が近いこと、これは本学が長年培ってきた伝統であり美風であると再認識した次第です。

一般論として改革に功罪はつきものです。大学改革の進展に伴い、その役割が終わった制度や金属疲労が生じてきたシステムなどは、憚ることなく改めるべきです。

本当に教職員の皆さんからは数多くの気づきをいただきました。私の6年間で幾ばくかでも本学での勤務、研究及び教育環境に資するものがあつたとすれば、全て教職員の方々のご協力によるものです。

その後の本学への影響・効果

当たり前のことなのですが、どの組織であれ人によって構成され、人が支えています。特に横浜市立大学を担っている教職員の方々は「本学を良くしたい」という共通目標で一致した人々です。この方々が予定調和や同調圧力に依らない、アカデミア本来の闊達な意見交換を進めていけば好循環サイクルに至ることは自明です。

ご紹介したい事例は数多くありますが、私の意識に強く残っているのはDS学部の新設、及び学部再編（国際教養学部、国際商学部、理学部）の二点になります。

多くを語ることは控えますが、困難を乗り越え、調整に調整を重ね、根気強く取り組まれた教職員、関係者の皆さんに改めてお礼を申し上げます。

市大の良い点

私が大好きな横浜市立大学。中でも特に素晴らしい点をランダムに記します。研究教育面では領域横断、文理融合といった、研究者や学生にとって魅力溢れる環境が整備されていること。

医学部及び附属二病院を有し先端研究、先進医療の担い手として横浜市民の深い信頼を得ていること。設置者である横浜市と大学側の双方向の親和性が極めて高いこと。

コンパクトで優秀な総合大学として、本学が益々市民に愛され続けることを祈念します。

その他

私の任期の最終と重なった、2020年当初から2021年3月末の日々が忘れられません。多分生涯忘れることの出来ない、新型コロナとの戦いの毎日でした。

2020年2月のダイヤモンドプリンセス号の横浜港接岸を発端に、附属二病院の休むことのない戦いが始まり今に続いています。両病院の医師、看護師、検査技師、事務の皆さんをはじめ全ての関係者が、文字通り全身全霊、不眠不休で立ち向かってきました。

大学では感染防止のためのオンライン授業を立ち上げるため、教員と職員が時間のない中を大車輪で奮闘し修学環境を間に合わせました。

患者さんのため、市民の皆さんのため、学生さんのために全力投球している皆さんの姿、立ち振る舞いに感動の毎日でした。今でも思い出す度にこみ上げるものを禁じ得ません。

全ての教職員の皆様に心から御礼申し上げます。